

日本語を母語とする英語学習者による他動詞の目的語欠如の誤り：予備的調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学大学院教育学領域 公開日: 2023-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大瀧, 綾乃, 中川, 右也, 箱崎, 雄子, 横田, 秀樹, 白畑, 知彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000165

日本語を母語とする英語学習者による他動詞の目的語欠如の誤り¹

—予備的調査—

Errors of Object Drop at Transitive Verb Structures by Japanese Learners of English: Preliminary Study

大瀧 綾乃², 中川 右也³, 箱崎 雄子⁴, 横田 秀樹⁵, 白畑 知彦⁶

Ayano OTAKI, Yuya NAKAGAWA, Yuko HAKOZAKI, Hideki YOKOTA
and Tomohiko SHIRAHATA

(令和 5 年 11 月 30 日受理)

ABSTRACT

It has been reported that second language (L2) learners tend to accept ungrammatical transitive sentences without objects (e.g., **I enjoyed very much*) as being grammatical (e.g., Wakabayashi & Negishi, 2003; Yuan, 1997). Furthermore, results of a grammatical judgment test conducted by Shirahata and Yokota (2023) revealed that, from among 31 items they examined, (i) judging the grammaticality of transitive verb sentences was the most difficult task for Japanese learners of English (JLEs) and that (ii) the correct percentage of rejections of transitive verb sentences without objects differed depending on the individual verbs. Thus, as a preliminary study, the purpose of this study is to investigate whether the degree of acceptance or rejection of object drop errors in transitive verb structures by JLEs differs depending on individual verbs. A total of 44 university JLEs with lower intermediate English proficiency participated in the grammaticality judgment test. They were asked to judge the grammaticality of sentences with 15 transitive verbs. The results revealed that the percentage of accurate rejections of ungrammatical transitive sentences differed based on individual verbs. That is, learners tended to correctly reject sentences with verbs such as *tell* and *accept*. On the other hand, they experienced difficulties in correctly rejecting sentences when verbs such as *reject* and *hit* were used. Regarding verbs with a low degree of correct percentage, the results revealed that JLEs tended to accept the sentences both with and without objects as

¹ 本稿は、第 48 回全国英語教育学会 香川研究大会（2023 年 8 月 19 日）にて口頭発表した内容に基づいている。

² 英語教育系列

³ 三重大学

⁴ 大阪教育大学

⁵ 静岡文化芸術大学

⁶ 教育学研究科

being grammatical. Further investigation is necessary for identifying the factor causing such individual verb differences.

1. はじめに

本研究の目的は、日本語を母語とする英語学習者（Japanese learners of English, 以下 JLEs）による他動詞の目的語が欠如した誤りへの気づきの程度が、動詞によって異なるかを明らかにすることである。英語を第二言語として習得する学習者は、**I enjoyed very much.*のように他動詞の目的語が欠如した文を文法的な文であると誤って判断することが知られている（Wakabayashi & Negishi, 2003; Yuan, 1997 他）

白畑・横田（2023）は 31 の異なる文法項目について、JLEs にとってどの項目が習得困難かまたは容易であるかを調査した。その結果、JLEs の多くが他動詞の目的語が欠如した文の誤りに気づかず、さらにその誤りの程度が実験に使用した動詞によって異なるというデータを提示している。すなわち、動詞によって JLEs が誤りに気づく程度に差があるのである。しかし、白畑・横田（2023）で使用された動詞の数は非常に少なく、実際に動詞別に正答率が異なるかどうかはさらなる調査が必要である。そこで本研究では、JLEs が動詞別に誤りを容認する、または否認する割合に差が生じるかどうかをより詳細に調査を行うことにする。

2. 研究の背景

2.1 動詞の分類

英語の動詞を他動詞と自動詞という視点で分類すると、(1) に示すように (1a) 他動詞、(1b) 自動詞⁸、(1c) 他動詞用法・自動詞用法のどちらも伴う自他両用動詞に分類できる（影山, 1996）。他動詞文は動詞の後ろに目的語を必要とし、「主語+動詞+目的語」の文構造となる。自動詞文は動詞の後ろに目的語を必要とせず、「主語+動詞」の文構造となる。本稿では、(1a) の他動詞を取り扱う。他動詞文は (1a) の例文に示すように動詞の後ろに目的語 *our health* を伴い、目的語が欠如した「主語+動詞」の文構造は誤りの文となる。

(1) 英語の動詞の分類

- | | |
|-----------|--|
| a. 他動詞 | 例：accept, damage, destroy, find
例文：Smoking damages our health. |
| b. 自動詞 | 例：sing, swim, appear, happen
例文：I swam in the swimming pool. |
| c. 自他両用動詞 | 例：break, close, increase, open
例文：Taro opened the window. / The window opened smoothly. |

2.2 他動詞の目的語欠如と日本語からの転移

英語と日本語の言語的特徴の違いの 1 つに、英語は主語や目的語を省くことができない言語

⁷ * アスタリスクは、その文が文法的ではないことを示す。

⁸ 自動詞はさらに非能格動詞と非対格動詞に分類されるが、この点については本稿では扱わない。

であり、日本語はそれらの要素を省くことができる言語だという点が挙げられる(長谷川, 1999, 久野, 1978; 中村, 2009 他)。(2) は英語の他動詞 buy を使用した文で、(2a) は buy の目的語 a book が存在するため適格な文となるが、(2b) では buy の目的語が欠如しているため誤りとなる。一方、(2) に対応する (3) の日本語の文では、(3b) のように他動詞「～を買う」の目的語「本」が省かれていても文法的な文となる。

- (2) a. I bought a book at the bookstore.
 b. *Ann also bought at the bookstore.
 (正しい文 : Ann also bought it at the bookstore.)

- (3) a. 私は本屋で本を買った。
 b. Ann も本屋で買った。

Wakabayashi and Negishi (2003) は、目的語の表出における日本語と英語の違いについて、機能範疇 *v* (little *v*) が持つ素性の強さが異なるためであると指摘している。英語では、*v* が強い素性を持つため、目的語は義務的に表出されるようになるが、日本語では目的語が音声素性 (PF feature) を持たない場合は *v* が強い素性を持つ必要がなく、そのため目的語が表出されないと説明している。

第二言語を習得する際には、母語の特性がさまざまな局面でその習得に大きな影響を及ぼしている(鈴木・白畑, 2012; White, 2003, 2020 他)。母語の特性が第二言語を学習する際に妨げとなることもあり、JLEs が英語を学習する際に日本語の特性をそのまま転移させ、文を理解したり産出したりしたと思われる現象も報告されている(白畑, 2013, 2015 他)。例えば白畑 (2013) では、JLEs が日本語では文頭に助詞「は」を伴う話題句を持っていくことができる特性を、主として主語が文頭に来る英語にも使い、「私たちの学校は (話題句) 土曜日に勉強する」を直訳し、**Our school studies on Saturdays.* (= *Students study on Saturdays at our school.*) (白畑, 2013, p.167) といった「話題句 + (空主語) + 動詞」の構造となっている英文を適格であると判断する JLEs がいることを報告している。JLEs が第二言語として英語の他動詞構造を学習する際に、文脈から目的語 (や主語) を推測できる場合には、(2b) のような文を適格であると判断する者もいるということだ。

2.3 先行研究

2.3.1 Yuan (1997)

Yuan (1997) は中国語を母語とする英語学習者 159 名を対象に、主語が欠如した文および目的語が欠如した文を彼らがどの程度容認するかについて調べるために、容認性判断テスト (acceptability judgment test) を行った。本稿では、目的語欠如の文に対するテスト結果のみを扱う。その結果、(4) のテスト文に対して容認度は 0 から 10 段階中の 5-7 程度であった (10 がもっとも容認できる)⁹。一方で、英語母語話者 (native speakers: NS) の容認度は 2-3 程度であ

⁹ Yuan (1997) は、容認性判断テストにおいて実験参加者自身が容認度を示す数の連続体を作成して答える方法を採用し (例 実験参加者が事前に 3 から 8 の範囲で回答すると決める)、そ

った。特に (4c) の文タイプでは、初級から上級までの習熟度 (most elementary から most advanced まで) の実験参加者の容認度は、NS の容認度と平均値の差が統計的に有意であった。このテスト結果より Yuan (1997) は、中国語を母語とする英語学習者が NS に比べて目的語が欠如した英文の誤りに気づきにくかったことを指摘している。

(4) Yuan (1997) が容認性判断テストで使用した実験文のタイプとテスト文例
(目的語欠如文のみ掲載)

a. Inanimate Null Object in Matrix Sentence

(主文にある他動詞の目的語 (無生物名詞句) が欠如した文)

*Mary's bike has gone wrong. Tomorrow I am going to repair for her.

b. Inanimate Null Object in Embedded Sentence

(埋め込み文にある他動詞の目的語 (無生物名詞句) が欠如した文)

*Mary lost her bike last week, but John says the police have found for her.

c. Inanimate Null Object Coindexed with an Argument in an Adjunct

(付加詞節内の項と同一指標である他動詞の目的語 (無生物名詞句) が欠如した文)

*When you finish using the computer, please let me use for a while.

(Yuan, 1997, p.480)

Yuan (1997) は、目的語欠如文の容認度の高さの理由を母語である中国語からの影響であると結論付けた。(5) に示すように、中国語では斜体 *e* で表示した目的語が欠如している文も文法的な文である。中国語は [+topic-drop] 言語¹⁰であり、(5b) のように話題句のある文も (5c) のように削除された空の話題句のある文も、どちらも文法的である。(5a) の空目的語 *e* は主節の主語 Zhangsan と同一指標ではなく、(5c) に示すような空の話題句 *e* と同一指標であると考えられる。Yuan (1997) は、中国語の母語話者が英語を学習する際には、英語は [-topic-drop] 言語であるために [+topic-drop] を [-topic-drop] に設定する必要があり、そのためには「英語では topic-drop は許されない」と学習しなければならないが、英語にはそのようなことを伝えるインプットがないために、目的語欠如の文が誤りであることに気づくのが難しいと指摘した。

- (5) a. Zhangsan_i shuo Lisi bu renshi *e**_{i/j}¹¹
Zhangsan say Lisi not know
"Zhangsan_i says Lisi doesn't know (him_{i/j})".
b. Neige ren_i Zhagsan shuo Lisi bu renshi *e*_i

の後、0-10 の範囲で値を換算した。

¹⁰ (5b) と (5c) の違いは、(5b) は話題句 Neige ren (that man) が存在し、(5c) は話題句が脱落していることである。(5c) のように中国語は話題句が脱落することが許される言語 ([+topic-drop]) であり、一方で英語は話題句が脱落することが許されない言語 ([-topic-drop]) である (Yuan, 1997, pp.473-474)。

¹¹ 中国語における空の目的語は、主節の主語ではなく談話主題 (the discourse topic; 文脈の中で語られている人物や物) と同一指標であると言われており (Huang, 1984)、(5a) の空目的語 *e* の指標 *j* は文脈の中にある文の話題句を指すと考えられる。

- that man Zhangsan say Lisi didn't know *e*.
 "Than man, Zhnagsan said Lisi didn't know *e*."
 c. (TOP *e_i*), Zhangsan shuo Lisi bu renshi *e_i*.
 Zhangsan say Lisi not know
 "**(TOP *e_i*) Zhangsan says Lisi doesn't know (him_{*i*})".

(Yuan, 1997, p.473)

2.3.2 Wakabayashi & Negishi (2003)

Wakabayashi and Negishi (2003) は Yuan (1997) と同様の目的で、大学生の JLEs34 名を対象に文法性判断タスクを実施した。JLEs が母語からの影響を受けるのであれば、主語が欠落した文と目的語が欠落した文を同程度に容認すると予測できるが、もしその容認度に非対称性 (asymmetry) が見られるとするならば、その要因が何なのかを探ることを目的とした。本稿では目的語の欠如の結果のみを扱う。テストの結果、(6a) から (6c) のような目的語が欠如した文を誤りであると正しく判断できた正答率は 45%以下であったと報告している。これに対して NS 9 名の正答率は約 90%と、高い正答率であった。このことにより、JLEs は目的語が欠如した他動詞文の誤りに気づくことが難しく、容認し易い傾向のあることがわかった。

- (6) Wakabayashi & Negishi (2003) が使用した実験文のタイプとテスト文の例
 (目的語欠如の文のみ掲載)

- a. Type 6 Object drop in main clauses (主節にある他動詞の目的語が欠如した文)

John's watch has broken. *Tomorrow he is going to ask the shop to repair.

(正答率: JLEs: 44%, NS: 89%)

- b. Type 7 Object drop in embedded clauses (埋め込み節にある他動詞の目的語が欠如した文)

*Mike lost his wallet last week, but Susan says that the police have found for him.

(正答率: JLEs: 35%, NS: 93%)

- c. Type 8 Object drop where the object is co-indexed with a preceding noun phrase

(直前の付加詞節内の名詞句と同一指標である他動詞の目的語が欠如した文)

*When you finish using your telephone, please let me use for a moment.

(正答率: JLEs: 41%, NS: 96%)

(Wakabayashi & Negishi, 2003, pp.64-65)

このような実験結果が得られた理由について、Wakabayashi and Negishi (2003) は、JLEs はその動詞が他動詞か自動詞かの区別ができていない可能性が考えられると考察した。英語の主語とは異なり、目的語においては、自動詞文のようにすべての文が目的語を要求するわけではないため、JLEs はその動詞が目的語を必要とするか否かについて単語 (動詞) ごとに学習する必要がある。また、英語は他動詞・自動詞の交替の際に例外を除いて日本語のように共通の語幹に接辞が付くことはないことも影響している可能性がある。

Yuan (1997) および Wakabayashi and Negishi (2003) の結果より、英語学習者は目的語が欠如した他動詞文の誤りに気づくことが難しく、文法的な文であると容認する傾向のあることが判明した。しかし彼らの研究目的は、主語と目的語の欠如に対する非対称性の原因について考察

することであり、他動詞文における目的語の欠如に焦点を置いて研究したわけではない。さらに、彼らの実験で使われた他動詞が不明であるため、どのような他動詞の場合に誤りがどの程度見られるのかが明らかになっていない。したがって、本研究ではこの点に焦点を当てて調査する。

2.3.3 白畑・横田 (2023)

白畑・横田 (2023) は文法項目別習得困難度順序を調査するため、236名の大学生 JLEs に文法性判断テストを実施した。調査で扱った 31 種類の文法項目の中には、前述したように他動詞文における目的語欠如の誤りも含まれている。(7) は彼らが調査で使用した他動詞の目的語欠如の誤りに関するテスト文とその正答率である。(7a) は buy、(7b) は send、(7c) は enjoy の目的語が欠如した文である。JLEs が (7a) から (7c) までの文を誤りであると判断し、文法的な他動詞文に訂正できた割合は低く、正答率は buy は 4.7%、send は 10.2%、enjoy は 5.5%であった。白畑・横田 (2023) は、(7a) から (7c) までの文は調査した文法項目の中で正答率が一番低く、JLEs が苦手であると言われている冠詞以上に困難な文法項目だと報告している。

白畑・横田 (2023) の調査結果より、(7a) buy と (7c) enjoy の正答率が (7b) send の正答率の 1/2 以下であることから、他動詞の目的語欠如の誤り文は正答率が低だけでなく、正答率に差があることも分かった。他動詞によって、JLEs が目的語欠如の誤りに気づく程度が異なる可能性がある。

(7) JLEs による他動詞の目的語欠如の誤り

- a. *Mary looked at the flowers carefully but didn't buy. (正答率 4.7%)
- b. *Mike wrote a letter but didn't send. (正答率 10.2%)
- c. *John enjoyed very much in Hawaii. (正答率 5.5%)

(白畑・横田, 2023, p.199)

動詞によって文の文法性を容認する程度が異なるという点は、動詞の規則過去形の結果についても言えるようだ。白畑・横田 (2023) では、(8) に示す一般動詞の規則過去形に関する誤りも調査しており、動詞が (8a) die と (8b) call の文においては正答率の差が 15.2%も見られたことを報告している。そして彼らは、この理由を考察する必要性を提唱している。

(8) 規則過去形-ed が脱落した誤り

- a. *The old lady die two years ago. (正答率 70.8%)
- b. *Sandy call Mary last night. (正答率 86.0%)

(白畑・横田, 2023, p.195)

本研究では、他動詞の目的語欠如の誤りについてさらに考察するため、先行研究 (Wakabayashi & Negishi, 2003; Yuan, 1997) とは異なる視点である「動詞の違いによる影響」が実際に多くの他動詞間で見られるかどうか調査を実施することにした。

3. 実験

3.1 仮説

本稿では (9) に示す仮説を立てた。

- (9) 使用される他動詞の相違によって JLEs が目的語の欠如を容認する、または否認する割合に差が生じる。

3.2 実験参加者

実験参加者は大学生 JLEs 44 名¹²であった。全員日本国内の大学 1 年生で、農学、理学、教育学、人文社会科学、グローバル共創科学を専攻とする学生である。彼らの英語習熟度は the Oxford Quick Placement Test (2001) の結果、初中級 (lower intermediate) であると判断された ($M: 33.27, SD: 6.06$)。

3.3 実験材料

実験参加者に文法性判断テストを実施した。本テストでは、(10) に示す 15 個の他動詞を使用した。テスト終了後、実験参加者にはこれらの他動詞の意味を日本語で書いてもらい、全員がテストで使用した他動詞の日本語訳を知っていることを確認した。

- (10) 文法性判断テストにて使用した他動詞

accept, buy, destroy, employ, enjoy, find, hire, hit, invite, put, recognize, reject, send, tell, use

文法性判断テストでは、(11) に示す Yuan (1997) および Wakabayashi and Negishi (2003) が実験で使用した文タイプの中より 3 つの文タイプ (Type A, Type B, Type C) を採用した。Type A は他動詞が主節 (単文) にある文、Type B は埋め込み節にある文、Type C は目的語が直前の付加詞節内の名詞句と同一指標となる文である。各他動詞について、目的語がある文と欠如している文を提示した。そして各タイプにつき、テスト文は 10 問 (目的語のある文: 5 問、欠如している文: 5 問) で合計 30 問、錯乱文も 20 問用意した。錯乱文には、自動詞、自他両用動詞を用いた文 (文法的と非文法的な文) を用いた。

- (11) 文法性判断テストにて採用した文のタイプとテスト文 (括弧内は状況文)

Type A 他動詞が主節 (単文) にある文

(目的語あり) (Ann carefully looked at the flowers in the shop.)

She bought them.

(目的語なし) (Taro carefully looked at the vegetables and fruits in the supermarket. However,)

*he didn't buy.

¹² 文法性判断テストを受けた大学生は合計 59 名であったが、下線部 (動詞と目的語) 以外のところで修正を行う等、テストの指示や実験目的から離れた修正がみられた者は分析データから外した。そのため、最終的に 44 名のデータを分析することになった。

Type B 他動詞が埋め込み節にある文

(目的語あり) (The high school offered my bother a part-time job as a teacher.)

He told me that he had accepted it.

(目的語なし) (The airline offered my sister a job at the airport.)

*She told me that she accepted.

Type C 他動詞の目的語が直前の付加詞節内の名詞句と同一指標である文

(目的語あり) When the office offered Taro a job, he rejected it.

(目的語なし) When the company offered Ann a job, *she rejected.

(12) は文法性判断テストの例である。他動詞 *hire* を使った文で、「タイプ A 他動詞が主節(単文)にある文」の例である。(12a) は目的語のある文、(12b) は目的語のない文である。実験参加者にはテスト文の下線部(文法的な文: 動詞と目的語、非文法的な文: 動詞)が正しく使われているか否かを判断してもらい、「④誤っている」と回答した場合には括弧内に正しいと思う文に書き換えてもらった。

(12) 文法性判断テストの例

a. 目的語のある文

【問題】 We needed John to become the new leader of the company.

So, we hired him.

㉞ 正しい

④ 誤っている 【 (修正した文を記入) 】

b. 目的語のない文

【問題】 John didn't show up for the job interview.

So, the company didn't hire.

㉞ 正しい

④ 誤っている 【 (修正した文を記入) 】

3.4 結果と考察

表1は目的語が欠如したテスト文のタイプ別実験結果である。データ分析では、実験参加者が目的語が欠如した文について誤っていると回答し、他動詞に目的語を表記した文法的な文に修正した場合に1点を与えた。正しいと回答した場合には0点を与えた。表1に示すように、いずれの文のタイプにおいても正答率は50%辺り、またはそれ以下と低いことがわかる¹³。平均値について一要因分散分析を行ったところ、主効果は見られず、文タイプの平均値間に差は見られないことがわかった ($F(2, 86) = 2.38, p = .10, \text{partial } \eta^2 = .05$)。よって、文タイプによって困難度に差がなかったと言える。

¹³ 目的語が明記されている他動詞文(主語—動詞—目的語)の結果はいずれの文のタイプにおいても正答率が93%以上と高かった(Type A: 95.46%, Type B: 97.28%, Type C: 93.64%)。

表 1. 実験結果 (目的語が欠如した文 : *主語—動詞)

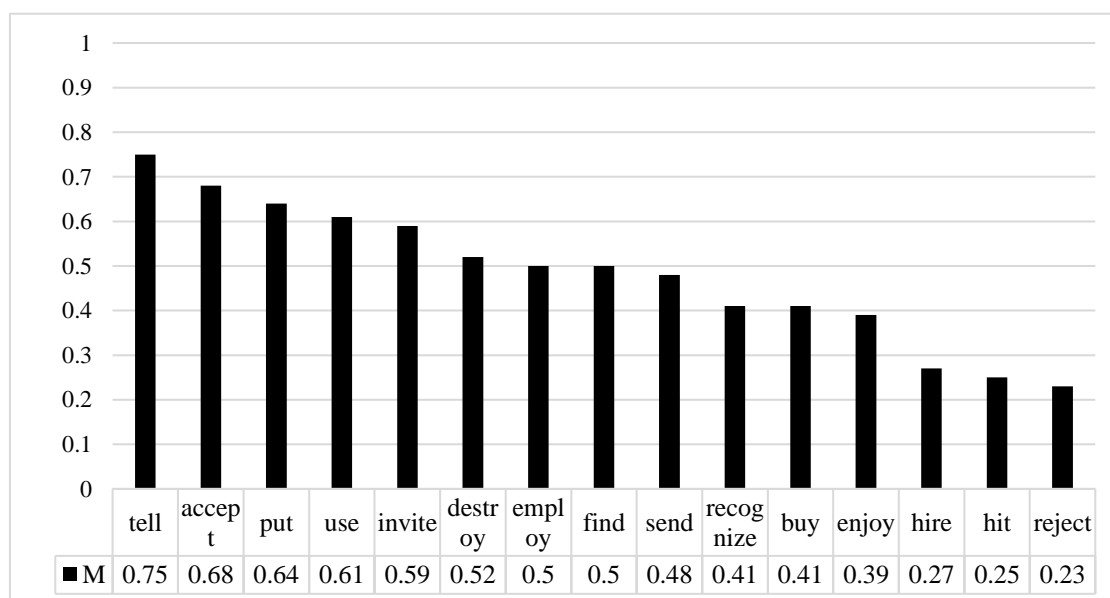
文タイプ	<i>M</i>	<i>SD</i>	正答率%
Type A	2.16	1.09	43.18%
Type B	2.46	1.34	49.10%
Type C	2.61	1.30	52.28%

注 : 最大値は 5 点

次に、動詞別に正答率を見ていく。図 1 は目的語が欠如した他動詞文について、各動詞の平均値を高い順に左から並べたものである。左端の tell は 15 個の他動詞の中で最も平均値が高く、0.75 (正答率 75.00%) であった。続いて accept が 0.68 (正答率 68.18%) と 2 番目に高い平均値であった。一方で、右から 3 番目にある hire は 0.27 (正答率 27.27%)、hit は 0.25 (正答率 25.00%)、reject は 0.23 (正答率 22.70%) と、最も低い平均値であった。

15 個の他動詞の平均値について、一要因分散分析を行った結果、主効果は統計的に有意であったため ($F(14, 602) = 5.28, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .11$)、ボンフェローニ法による多重比較検定を行ったところ、tell は buy、enjoy、hire、hit、reject との平均値の差が統計的に有意であることがわかった¹⁴。同様に accept、put についても、平均値の低い hire、hit、reject との平均値の差が統計的に有意であった。したがって、実験に参加した大学生 JLEs が他動詞の相違によって目的語の欠如を容認する、または誤りに気づく程度には差があることがわかった。

図 1 各他動詞の平均値 (目的語が欠如した場合)



¹⁴ ボンフェローニ法による多重比較検定の結果 ;

tell > reject ($p < .001$), hit ($p < .001$), hire ($p < .001$), enjoy ($p = .03$), buy ($p = .03$)

accept > reject ($p < .001$), hit ($p = .004$), hire ($p = .003$)

put > reject ($p = .057$), hit ($p = .02$), hire ($p = .03$) (put と reject には有意な傾向が見られた)

use > reject ($p = .02$)

(13) に平均値が高かったテスト文を提示する。(13a) は tell、(13b) は accept、(13c) は put を用いたテスト文である。

(13) 平均値 (正答率) が高かったテスト文

- a. tell, 正答率 75.00%
*When you see Ann, please tell *e* to wait for a moment.
- b. accept, 正答率 68.18%
The airline offered my sister a job at the airport. *She told me that she accepted *e*.
- c. put, 正答率 63.64%
After meeting his kids, *he put *e* to his car.

(14) に平均値が低かったテスト文を提示する。(14a) は reject、(14b) は hit、(14c) は hire を用いたテスト文である。目的語が欠如した他動詞文について、正答率が高い動詞と低い動詞に差が見られた理由について、今後考察する必要がある。

(14) 平均値 (正答率) が低かったテスト文

- a. reject, 正答率 22.70%
*When the company offered Ann a job, she rejected *e*.
- b. hit, 正答率 25.00%
The teacher saw Taro crying in the classroom. *His classmates said that they had not hit *e*.
- c. hire, 正答率 27.27%
John didn't show up for the job interview. So, *the company didn't hire *e*.

(15) は4つの回答パターンを示したものであり、その各回答パターンの詳細な分析結果を表2に示しておく。

(15) 文法性判断テストにおける回答パターン

- | | | | | |
|----|-----------------|---|--------|------|
| A. | 主語+他動詞+目的語 | → | 正しいと回答 | (正答) |
| | *主語+他動詞(目的語が欠如) | → | 誤りと回答 | (正答) |
| B. | 主語+他動詞+目的語 | → | 正しいと回答 | (正答) |
| | *主語+他動詞(目的語が欠如) | → | 正しいと回答 | (誤答) |
| C. | 主語+他動詞+目的語 | → | 誤りと回答 | (誤答) |
| | *主語+他動詞(目的語が欠如) | → | 誤りと回答 | (正答) |
| D. | 主語+他動詞+目的語 | → | 誤りと回答 | (誤答) |
| | *主語+他動詞(目的語が欠如) | → | 正しいと回答 | (誤答) |

表2 正答率と4つの回答パターン (人数)

	A(正答)	A	B	C	D
tell	75.00%	32 (名)	11 (名)	1 (名)	0 (名)
accept	68.18%	29	13	1	1
put	63.64%	27	15	1	1
invite	59.09%	26	15	0	3
destroy	52.27%	23	21	0	0
employ	50.00%	22	20	0	2
use	61.36%	22	16	5	1
find	50.00%	21	22	1	0
send	47.73%	20	22	1	1
buy	40.91%	18	26	0	0
enjoy	38.64%	17	26	0	1
recognize	40.91%	17	23	1	3
hire	27.27%	12	31	0	1
hit	25.00%	11	32	0	1
reject	22.73%	8	32	2	2

パターン A は正答で、目的語のある文を正しいと答え、目的語が欠如した文を誤りであると答えたパターン、B は目的語のある文を正しいと答えることができたが、目的語の欠如の文を誤って正しいと回答したパターンである。正答率の低かった *reject*、*hit*、*hire* は B の回答パターンが多かったことがわかった。つまり、正答率が低くなるほど、目的語が欠如しているという誤りに気づきにくく、目的語がある文も欠如した文も両方正しい文であると回答したということになる。この理由を考察する必要がある。1つの可能性として、Wakabayashi and Negishi (2003) が指摘したように、学習者はその動詞が自動詞または他動詞か（目的語を必要とするか否か）について動詞ごとに個別に学習しているという可能性が挙げられる。*tell*、*accept*、*put* のような正答率の高い他動詞は「目的語を必要とする」と捉えられ¹⁵、*hire*、*hit*、*reject* のような正答率の低い他動詞は、自他両用動詞のように「他動詞用法も自動詞用法もどちらにも使える」と捉えている可能性がある。しかし、なぜ動詞によって「他動詞用法のみにしか使えない」または「他動詞用法も自動詞用法もどちらにも使える」といった認識の違いが出るのかは今後考察していく必要がある。

¹⁵ 文法性判断テストを実施後に実験参加者の13名にインタビュー調査を実施し、自身の回答についてなぜそのように答えたのかを話してもらった。正答率の高い *tell* について、5名の参加者が *tell*+人 (+モノ) と *tell* の後ろに目的語が付くことを学習したためと答えた。2番目に正答率が高かった *accept* については、4名が *accept* の後ろに目的語がないといけないと思った、目的語がないと文意が伝わらないと答えた。

一方で、正答率の低い *hit* は、4名が *hit* の後ろに目的語がなくても意味が伝わる、自然な文であると答えた。*reject* (テスト文: *When the company offered Ann a job, she rejected.) については、3名が直前に a job があるために *reject* の後ろに目的語がなくても伝わると答えた。

4. まとめと今後の研究

本稿では、「使用される他動詞の相違によって JLEs が目的語の欠如を容認する、または否認する割合に差が生じる」という仮説を立て、文法性判断テストを用いて 15 個の他動詞を用いて調査した。その結果、他動詞の相違によって目的語の欠如を容認する、または否認する割合に差が生じるという仮説を支持する結果が得られた。目的語欠如を容認しやすい、正答率の低かった *reject*、*hit* 等を用いた他動詞文では、目的語がある文と欠如している文の両方を容認する傾向にあることもわかった。

本研究は予備的調査として実施したものであり、今後の研究では、他動詞の目的語欠如の誤りについて、動詞の相違によって誤りの程度に違いがみられる原因を考察する必要がある。そのために、次の 4 点について考えたい。第 1 点目として、実験で使用する問題文を精査し、再実験を実施することである。本稿において採用したテスト文のタイプ (Type A、Type B、Type C) の文は、Yuan (1997) および Wakabayashi and Negishi (2003) で調査された文であるが、本実験では文タイプ間の平均値の差は見られなかったため、今後は他の文構造を含めて調査したい。第 2 点目に、実験で使用する他動詞を再考する必要がある。本稿では、実験で使った他動詞が持つ特徴 (使用頻度、親密度等) を考慮しておらず、ばらつきがあった可能性がある。他動詞が持つ特徴が結果に影響を与えないように、調査する他動詞を決定する必要がある。第 3 点目に、すべてのテスト文において状況文とテスト文を設定したい。今回はテスト文の中にはその前に状況文がある文とない文が混在していたため、すべてのテスト文において状況文を置いて文脈を与えたうえで、学習者がどう判断するかを調査すべきだったと考える。最後に、目的語が欠如した他動詞文を作成する際に、欠如した目的語を考慮して問題文を作成することである。(13a) の *tell* を用いた目的語が欠如した文では、欠如した目的語は先行名詞の *Ann* しか考えられないが、(14a) の *reject* を用いた文では、*reject* の欠如した目的語が *Ann* にオファーした実態のある *a job* と一致するかといえ、完全に一致するとは言い切れず、一致しない可能性もあった。欠如した目的語からの影響があるか否かは現段階ではまだ判然としないため、以上の点も踏まえて実験問題文を作成したい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 21H00541 (代表: 白畑知彦)、23K00750 (代表: 横田秀樹) および 20K13131 (代表: 大瀧綾乃) の助成を受けたものです。

参考文献

- 長谷川信子 (1999). 『生成日本語学入門』大修館書店.
- Huang, C. T. J. (1984). On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic Inquiry*, 53, 1-574.
- 影山太郎 (1996). 『動詞意味論』くろしお出版.
- 久野暉 (1978). 『談話の文法』大修館書店.
- 中村捷 (2009). 『実例解説英文法 第 3 版』開拓社.
- 白畑知彦 (2013). 「否定証拠を中心とした明示的英文法指導の効果検証: 予備的調査」『教科開

発学論集』第1巻, 163-172.

- 白畑知彦 (2015). 『英語指導における効果的な誤り訂正—第二言語習得研究の見地から』大修館書店.
- 白畑知彦・横田秀樹 (2023). 「英語文法項目別の習得困難度—大学生を対象とした予備調査—」大瀧綾乃・中川右也・若林茂則 (編) 『言語の習得』 (pp. 187-207). くろしお出版.
- 鈴木孝明・白畑知彦 (2012). 『ことばの習得: 母語獲得と第二言語習得』くろしお出版.
- UCLES (2001). *Oxford Quick Placement Test*. Oxford University Press.
- Wakabayashi, S., & Negishi, R. (2003). Asymmetry of subjects and objects in Japanese speakers' L2 English. *Second Language*, 2, 53-73. doi: https://doi.org/10.11431/secondlanguage2002.2.0_53
- White, L. (2003). *Second language acquisition and universal grammar*. Cambridge University Press.
- White, L. (2020). Linguistic theory, universal grammar, and second language acquisition. In B. VanPatten, G.D. Keating & S. Wulff (Eds.), *Theories in second language acquisition* (pp. 19-39). Routledge. doi: <https://doi.org/10.4324/9780429503986>
- Yuan, B. (1997). Asymmetry of null subjects and null objects in Chinese speakers' L2 English. *Studies in Second Language Acquisition* 19, 467-497. doi: <https://doi.org/10.1017/S0272263197004038>